

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：33919

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2017

課題番号：25780380

研究課題名(和文) 社会的文脈における自己制御のメカニズムおよび適応機能の解明

研究課題名(英文) Mechanism and adaptive function of self-regulation in social context

研究代表者

原田 知佳 (Harada, Chika)

名城大学・人間学部・准教授

研究者番号：00632267

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、社会的場面でいかに自己を主張できるか、抑制できるかにかかわる能力である社会的自己制御に着目し、青年前期における発達的变化、および集団内で発揮される自己制御機能について検討を行った。分析の結果、(1)中学1～3年にかけて自己主張や自己抑制は直線的に上昇し、とりわけ環境移行期である中学1年時は親や教師との温かい関りが自己制御能力の促進に重要であること、(2)親、地域住民、教師との相互作用が子どもの自己抑制に対し相乗的にポジティブな影響を与えること、(3)感情読み取り能力や自己制御の集団平均値がともに高いグループほど、集団パフォーマンスも満足度も高いこと、が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In this research, we studied the developmental changes in the early adolescent years and the self-regulating function working within the group, focusing on social self-regulation, which is the ability to assert and inhibit self in social situations. As results of studies and analyses, (1) self-assertion and self-inhibition increased linearly over 1 to 3 years of junior high school, especially during the first year of junior high school, which is the environmental transition period; Warm relationships with parents and teachers promoted self-inhibition, (2) the interaction with parents, local residents, and teachers had a synergistic positive influence on child's self-inhibition ability, (3) the high group value of emotion reading ability and social self-regulation contributed the collective performance and the satisfaction.

研究分野：社会心理学

キーワード：自己制御 自己主張 自己抑制 社会化 社会的適応 発達 社会的感受性 小集団

1. 研究開始当初の背景

近年、セルフ・コントロール (Moffitt et al., 2011)、やり抜く力 (Duckworth, 2016)、非認知能力 (Heckman, 2013) など、自分の行動を適切に制御できるか否かにかかわる能力である自己制御概念に注目が集まっている。自己制御は、学校・職場での適応的行動、食行動や体重管理、対人関係、心身の健康といった幅広い適応指標と関連があるだけでなく (de Ridder et al., 2012)、幼少期の自己制御の高さが、10年後の学力や問題行動、40年後の脳機能を予測するなど長期的な影響も報告されている (Casey et al., 2011)。

自己制御には、ダイエット場面のように個人の目標に向けて自己の行動を制御するといった個人的場面における自己制御と、他者や集団の中で適切に自己を主張したり、抑制したりする社会的場面における自己制御が存在する。従来の研究では、これら2種類の自己制御を弁別せずに検討しているものが多いが、青年期においては両自己制御能力が弁別可能であること、個人的場面での自己制御は衝動的購買行動や摂食障害傾向など個人的場面での問題行動と、社会的場面における自己制御は非行や社会的迷惑行為といった社会的場面での問題行動との結びつきが強いことが報告されている (原田他, 2010)。

これまでの研究の問題点として、一つは、欧米人を対象とした研究では縦断データをもとに自己制御の発達軌跡が検討されているものの、日本人の青年期を対象とした縦断データに基づく検討がなされていないことが挙げられる。もう一つは、先行研究の多くは個人個人の認知や行動を対象とした研究のみで、集団の中で個人個人の自己制御能力がどのように発現し、集団パフォーマンスに結びつくのかといった、集団のダイナミクスを考慮した検討がなされていないことが指摘できる。

2. 研究の目的

本研究では、他者が関わる社会的場面での自己制御として自己主張と自己抑制から成る社会的自己制御に着目し、青年前期における発達の变化、および集団内で発揮される自己制御について検討を行うことを目的とした。具体的には、1) 中学生を対象に3年間の縦断データを収集し、社会的場面における自己制御の発達の变化の検討、および、親・教師・友人・地域住民といった子どもの社会化の担い手間の相乗的・補完的影響を検討した。また、2) メンバーの自己制御能力および他者の社会的感受性 (他者の感情を読み取る能力) が高いグループは、小集団活動時の目標共有や役割分化の時期を早めることによって、結果として集団パフォーマンスを促進するといった仮説を検討した。

3. 研究の方法

(1) 社会的場面における自己制御の発達の变化の検討

縦断データを収集するため、公立中学校に通う中学生を対象に、2014年1月、2015年1月、2016年1月の3回にわたり、同一対象者に質問紙調査を実施した。質問紙は以下の尺度で構成された。(a) 親との関わり: 受容と統制からなる養育認知尺度 (姜・酒井, 2006) を用いた (5件法)。(b) 友人との関わり: 友人関係機能尺度 (丹野, 2008) を用いた (5件法)。(c) 教師との関わり: 配慮、厳しさ、指導、接近からなる教師のリーダーシップ尺度 (三隅・矢守, 1989) を用いた (5件法)。(d) 地域住民との関わり: 非公式社会的統制と社会的凝集性・信頼から成る集合的有能感尺度 (吉澤他, 2009) を用いた。(e) 社会的自己制御: 自己主張、持続的対処・根気、感情・欲求抑制からなる原田他 (2008) の尺度を用いた。

(2) 集団内で発揮される自己制御の検討

実験内容の改良を兼ねて、複数回集団実験を行った。いずれも大学生を対象に、5~7名からなる小集団を形成した上で、合意形成課題 (e.g., NASA 課題 (柳原, 1982)) を解いてもらった。

実験は、() 個人で順位付けするフェイズ、() 集団で合意形成を行うフェイズ、() 質問紙の回答を行うフェイズ、で構成されていた。() の結果をもとに、集団の課題得点として、グループ得点と正解とのズレを算出した (得点低いほど成績が良い)。

質問紙のフェイズでは、相互作用行動として、(a) 目標共有、(b) 役割分化、(c) 話し合いの明確さ、(d) 一体感、各々の生起時期を尋ねた。これらの項目は、ビジュアルアナログスケールを用い、話し合い終了を 100% として数値を変換した。また、(e) 満足度を 8 件法で尋ねた。さらに、社会的自己制御 (原田他, 2008) と、Reading the Mind in the Eyes Test アジア版 (Adams et al., 2009; 吉川左紀子氏・野村光江氏により作成されたもので、36枚から成る目周辺の写真を提示して、そこから感情を適切に読み取れる程度を測定する) を用いて社会的感受性を測定した。

4. 研究成果

(1) 社会的場面における自己制御の発達の变化の検討

社会的自己制御の発達軌跡を検討するため、下位因子ごとに潜在曲線モデルを実施した。自己主張、持続的対処・根気、感情・欲求抑制のいずれも傾きの平均が有意であり、中学1年から3年にかけて直線的に上昇することが確認された。また、持続的対処・根気については、傾きの分散も有意であり、測定時点間の変化量にも個人差があることが確認された。

また、親・友人・教師との関わりが社会的自己制御の発達軌跡に及ぼす影響を検討するため、条件付き潜在曲線モデルを実施した。自己主張については、親の受容や統制といった養育態度が切片に正の影響を及ぼしていた。一方、持続的対処・根気、感情・欲求抑制といった自己抑制的側面については、教師の配慮ある関わりや友人関係から切片への正の影響が共通して確認された。また、感情・欲求抑制については、有意傾向ではあるが、教師の厳しさから傾きに対して負の影響が確認された。当該結果は、横断データをもとにした結果(原田他, 2014)とは異なる結果であり、縦断データをもとにした分析の重要性が確認されたといえる。なお、中学1年時は、小学校から中学校への移行期で問題行動が顕在化しやすい時期でもある(中1ギャップ)。そのため、生徒の気持ちを理解したり、相談に応じたりする等、親が果たす役割と類似する働きかけが大切になり、結果として、1年時における親や教師の温かい関わりから自己抑制への正の影響が確認された可能性が考えられる。言い換えると、中1ギャップの背景にある環境移行時のストレスへの適応や対人葛藤の解決を促す自己抑制能力を高めるために、教師による子どもへの配慮が有効である可能性が示唆される。

さらに、子どもの自己制御と社会化の担い手との双方向的影響を同時に検討するため、交差遅延効果モデルを実施した。その結果、持続的対処・根気において、友人との双方向的影響が確認された。

社会化の担い手間の相乗的・補完的影響を検討したところ、持続的対処・根気においては、親と教師の単独の効果に加えて、親×地域住民の相乗的影響が確認された。感情・欲求抑制においては、親の単独の効果に加えて、親×教師の相乗的影響が確認された。これらの結果は、社会化の担い手(親・教師・地域住民)が一貫した指導を行うことが自己制御の促進にとって有効である可能性を示唆する。なお、親から肯定的な影響を受けられなくとも、教師や地域住民から肯定的な影響を受ければ子どもの社会化は促進されるといった相補的影響の存在については、本研究では確認できなかったものの、それは全体的傾向として分析したためであり、一つ一つのケースを詳細に分析することによって相補的影響の存在も確認できる可能性はあり得ると考えられる。

(2) 集団内で発揮される自己制御の検討

大学生を対象に、5,6名のメンバーから構成される小集団パフォーマンスに対して、メンバーの社会的感受性(他者の感情を読み取る能力)や自己制御がどのようにかかわっているのかを検討したところ、社会的感受性や自己制御の集団平均値がともに高いグループほど、集団パフォーマンスも満足度も高いといった結果が示された。自己制御と社会的

感受性の偏りは、「場を読めない行動制御」や「場を読めるが行動制御の実行欠如」につながるがゆえに、集団パフォーマンスが低下する可能性が示唆された。また、社会的感受性や自己制御の集団平均値は、役割分化や目標共有の時期を早めることで優れた集団パフォーマンスに繋がるといった、媒介変数に関する検討も行ったが、役割分化や目標共有の早さは媒介しておらず、媒介変数の特定には至らなかった。媒介変数については明らかにならなかったものの、日本においてもメンバーの社会性が集団パフォーマンスと関連することを示した点、またメンバーの社会的感受性だけでなく自己制御もともに集団パフォーマンスと関連していることを示した点は、今後の集団研究において重要な意味を持つと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(雑誌論文)(計10件)

玉井颯一・吉田琢哉・原田知佳・吉澤寛之・浅野良輔・吉田俊和(2018). 仲間関係と教師の指導が中学生の共感性に及ぼす影響 2時点の縦断データに基づく検討 東海心理学研究, 12, 47-54. (査読有)

吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和(2017). 養育・しつけが反社会的行動に及ぼす分別の影響 適応性を考慮した社会的情報処理による媒介過程 教育心理学研究, 65, 281-294. (査読有)

doi:10.5926/jjep.65.281

原田知佳(2017). 他者の信頼性判断に及ぼす孤独の影響 笑顔・真顔の他者に対する高信頼者・低信頼者の評価 応用心理学研究, 42, 261-262. (査読有)

https://j-aap.jp/JJAP/JJAP_423_261-262.pdf
Yoshizawa, H., Yoshida, T., Park, H., Nakajima, M., Ozeki, M., Harada, C. (2016). Neighborhood interaction factors versus social compositions in predicting youth socialization development: An international research, Japanese Journal of Applied Psychology, 42, 25-35. (査読有)

https://j-aap.jp/JJAP/JJAP_42S_25-35.pdf
浅野良輔・吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・玉井颯一・吉田俊和(2016). 養育者の養育態度が青年の養育認知を介して社会化に与える影響 心理学研究, 87, 284-293. (査読有)

doi:10.4992/jjpsy.87.15013
Loughnan, S., Fernandez-Campos, S., Vaes, J., Anjum, G., Aziz, M., Harada, C., Holland, E., Singh, I., Puvia, E., & Tsuchiya, K. (2015). Exploring the Role of Culture in

Sexual Objectification: A Seven Nations Study, *International Review of Social Psychology*, 28 (1), 125-152. (査読有)
原田知佳・吉澤寛之・朴賢晶・中島誠・尾関美喜・吉田俊和 (2014). 日・韓・中・米における社会的自己制御と逸脱行為との関係 パーソナリティ研究, 22, 273-276. (査読有)
doi:10.2132/personality.22.273
吉澤寛之・吉田俊和・中島誠・吉田琢哉・尾関美喜・原田知佳 (2014). 地域防災に寄与する集合的有能感の醸成 マルチレベル分析を用いた検討 東海心理学研究, 8, 12-19. (査読有)
竹橋洋毅・高沢佳司・原田知佳・服部陽介 (2014). 制御焦点と目標までの時間的距離の知覚の関係性 モチベーション研究, 3, 2-6. (査読有)
原田知佳・土屋耕治・吉田俊和 (2013). 社会的自己制御における高次/低次解釈と熟慮的/遂行的マインドセットの効果 社会心理学研究, 29, 32-49. (査読有)
doi:10.14966/jssp.KJ00008931226

[学会発表](計 33 件)

Harada, C., & Tsuchiya, K. (2018, March) Group performance and sociality: Examining the role of social sensitivity and self-regulation. Poster session presented at the 19th annual Society for Personality and Social Psychology conference, Atlanta, Georgia.
Tsuchiya, K., & Harada, C. (2018, March) The facilitative effect of social sensitivity in the consensus building process. Poster session presented at the 19th annual Society for Personality and Social Psychology conference, Atlanta, Georgia.
原田知佳・土屋耕治・藤原健・秋保亮太・亀田達也 (2017). ワークショップ 集団パフォーマンスの科学の構築へ向けて: 小集団のダイナミックスの展開 日本社会心理学会第 58 回大会, 24.
原田知佳 (2017). マルチタスク習慣は先延ばしを促進するのか? 日本社会心理学会第 58 回大会発表論文集.
吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和 (2017). 社会化エージェントの多層的影響に関する研究 (26) Mover-stayer 潜在移行分析によるエージェント資源と反社会性の関連の検討 日本社会心理学会第 58 回大会.
吉澤寛之・吉田俊和・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・菅原ますみ (2017). シンポジウム 社会化の担い手たちはいかにして子どもの社会性を育むのか 親・友人・教師・地域住民の多層的影響の実証的検討 (話題提供者) 日本教育心理学会第 59 回総会, JD02.

吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和 (2017). 社会化エージェントの多層的影響に関する研究 (22) Mover-stayer 潜在移行分析によるエージェント資源と向社会性の関連の検討 日本教育心理学会第 59 回総会.
原田知佳・吉澤寛之・吉田琢哉・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和 (2017). 社会化エージェントの多層的影響に関する研究 (25) 親子の養育態度認識のズレが子の向社会性に及ぼす影響 日本心理学会第 81 回大会.
原田知佳・吉澤寛之・吉田琢哉・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和 (2017). 中学生における社会的自己制御の発達軌跡 親・友人・教師との関わりを踏まえた潜在曲線モデルによる検討 日本発達心理学会第 28 回大会発表論文集, 220.
吉田琢哉・吉澤寛之・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和 (2016). 社会化エージェントの多層的影響に関する研究 (20) 担任教師の指導スタイルの変化が中学生の向社会性に与える影響 日本教育心理学会第 58 回総会発表論文集, 440.
吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和 (2016). 社会化エージェントの多層的影響に関する研究 (19) エージェント潜在クラスが中学生の向社会性に及ぼす因果的影響 日本教育心理学会第 58 回総会発表論文集, 439.
吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和 (2016). 社会化エージェントの多層的影響に関する研究 (18) エージェント潜在クラスが中学生の反社会性に及ぼす因果的影響 日本社会心理学会第 57 回大会, 69.
吉田琢哉・吉澤寛之・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和 (2016). 社会化エージェントの多層的影響に関する研究 (17) 担任教師の指導スタイルにおける 1 年次と 3 年次の一貫性が中学生の向社会性に与える影響 日本社会心理学会第 57 回大会, 68.
原田知佳・土屋耕治 (2016). メンバーの社会性が集団パフォーマンスに与える影響 他者の感情理解と自己制御に着目したマルチレベル分析による検討 日本社会心理学会第 57 回大会.
Tsuchiya, K., & Harada, C. (2016, August). The Effect of Social Sensitivity on Collective Intelligence: The Moderation Effect of Task's Verbal Superiority in Japanese Culture. Poster session presented at the 23rd Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology, Nagoya, Japan.
Harada, C., Shiraga, K., Kawamoto, S.,

- Hatanaka, M., & Kawano, K. (2016, July). Development of school based suicide prevention program (4): The effect of the GRIP program in high-risk adolescents defined by behavioral inhibition and activation systems. Poster session presented at the 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan.
- 土屋耕治・原田知佳 (2015). 相互作用活動を通じたパーソナル・スペースの予測と調整 社会的感受性との関連から 日本社会心理学会第 56 回大会.
- 土屋耕治・原田知佳 (2015). 社会的感受性と身体活動を伴う小集団の課題パフォーマンス ブロック積み上げ課題を用いた検討 日本グループ・ダイナミックス学会第 62 回大会. (優秀学会発表賞受賞)
- 吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和 (2015). 社会化エージェントの多層的影響に関する研究 (16) 中学生を対象としたエージェント潜在クラス間の反社会性の比較 日本心理学会第 79 回大会発表論文集, 106.
- 吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和 (2015). 社会化エージェントの多層的影響に関する研究 (13) 中学生を対象としたエージェント潜在クラス間の向社会性の比較 日本教育心理学会第 57 回総会発表論文集, 301.
- ②① 吉田琢哉・吉澤寛之・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和 (2015). 社会化エージェントの多層的影響に関する研究 (12) 中学生と大学生の各親子が認知する養育の差異 日本教育心理学会第 57 回総会発表論文集, 300.
- ②② 原田知佳・吉澤寛之・吉田琢也・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和 (2014). 社会化エージェントの多層的影響に関する研究 (9) 中学 3 年間における親・友人・教師エージェントが自己制御に及ぼす影響の変化 日本教育心理学会第 56 回大会発表論文集, 451.
- ②③ 吉澤寛之・吉田琢也・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和 (2014). 社会化エージェントの多層的影響に関する研究 (8) 親・友人・教師エージェントが中学生時の適応的・不適応的社会化指標に及ぼす個別的影響 日本教育心理学会第 56 回大会発表論文集, 450.
- ②④ 吉澤寛之・吉田琢也・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和 (2014). 社会化エージェントの多層的影響に関する研究 (7) 親・友人・教師エージェントが中学生時の社会化潜在指標に及ぼす影響 日本心理学会第 78 回大会.
- ②⑤ 原田知佳・土屋耕治 (2014). 他者感情が読み取れるだけでは幸せになれない? 社会的感受性および自己制御と幸福感の関連 日本社会心理学会第 55 回大会.
- ②⑥ 吉澤寛之・吉田琢也・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和 (2014). 社会化エージェントの多層的影響に関する研究 (6) 潜在プロフィール分析を用いたエージェントクラス間の反社会性の比較 日本社会心理学会第 55 回大会 北海道大学 .
- ②⑦ Yoshizawa, H., Yoshida, T., Harada, C., Park, H., Nakajima, M., & Ozaki, M. (2014, July). Multicultural Universality in the Protective Effect of Neighborhood Collective Efficacy on Antisocial Behavior: Mediation of Socialization and Unstructured Activities. Poster session presented at the 28th International Congress of Applied Psychology, Paris, France.
- ②⑧ 原田知佳・土屋耕治 (2013). 集団内で発揮される自己制御の検討(2) 集団レベルを用いた社会的感受性との交互作用効果に着目して 日本社会心理学会第 54 回大会.
- ②⑨ 土屋耕治・原田知佳 (2013). 集団としての社会的感受性が合意形成過程へ与える影響 まなざしからの心の読み取りと合意形成過程への満足との関連 日本社会心理学会第 54 回大会.
- ③⑩ 原田知佳 (2013). 社会的自己制御の内的プロセスの検討 自己制御行動の価値, コスト, 誘惑評定に着目して 日本パーソナリティ心理学会第 22 回大会.
- ③⑪ 原田知佳・土屋耕治 (2013). 社会的感受性が合意形成に果たす役割(2) 社会的自己制御との交互作用効果に着目して 日本心理学会第 77 回大会発表論文集, 3AM-014. (学術大会優秀発表賞受賞)
- ③⑫ 土屋耕治・原田知佳 (2013). 社会的感受性が合意形成に果たす役割(1) まなざしからの心の読み取りと集団合意形成時の発言量との関連 日本心理学会第 77 回大会発表論文集, 3AM-020 .
- ③⑬ 原田知佳・吉澤寛之・吉田琢哉・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和 (2013). 社会化エージェントの多層的影響に関する研究(2) 親と教師による相互補完的役割に着目して 日本教育心理学会第 55 回総会, 427.
- 〔図書〕(計 2 件)
- 原田知佳 (2013). はずれる: 犯罪 日本発達心理学会 (編) 「発達心理学事典」丸善出版, pp. 228-229.
- 原田知佳 (2013). 社会的環境と自己制御 二宮克美・浮谷秀一・堀毛一也・安藤寿康・藤田主一・小塩真司・渡邊芳之 (編)「パーソナリティ心理学ハンドブック」 福村出版

〔その他〕
ホームページ等
<https://chikaharada.wordpress.com/>

6．研究組織
(1) 研究代表者
原田 知佳 (HARADA CHIKA)
名城大学・人間学部・准教授
研究者番号：00632267